S.I.C.　-the System of Isolation for C.

相羽わをん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ．Ｉ．Ｃ．　－ｔｈｅ　Ｓｙｓｔｅｍ　ｏｆ　Ｉｓｏｌａｔｉｏｎ　ｆｏｒ　Ｃ．

【Ｎコード】
Ｎ４４９２Ｘ

【作者名】
相羽わをん

【あらすじ】
建国の王カルロスＩ世が没してから数百年後、記憶喪失の少女と、玉座を目指した少年が出会うとき……世界の歴史はヒずミだす……！国宝級魔法使いと宮廷医師団員の兄弟、そして我欲（？）の強すぎる女性執事などと関わりながら、２人が目指すのは？？。

中世ヨーロッパ風異世界を舞台に、少女リアを追った話題作！　に、なる予定！

あの夜

ある半月の夜。
暗い部屋の中で、暖炉の火だけがごうごうと燃えている。少女は暖炉の前に立っていた。お忍びで城下へ出かけた時の町娘の服を着て、手には病床の祖父に宛てた手紙。斜めがけにした袋には、食料と水、宝石箱。
王の孫娘というだけで手にする事ができた、貴重な書物や、自分好みの服、職人が丹誠込めて作った靴、絵画…ああ、全てを置いて逃げる時が来たのだ。
少女は息を吐いた。
少し惜しい気はした。しかし、それは生きて喜びを感じられるならこそ、惜しむべき。命の糧を得る時に売ればいい…そう思って装飾性のない宝石ばかりを集めていれた。
ただ、祖父が少女のためにあつらえたティアラだけは、売るためでなく、形見として持って行くつもりであった。ティアラの正面の宝石は、父と母の形見。母は幼い頃亡くなり、祖父の親友であった父は行方知れずだという。
「おじい様」
少女は手紙を見つめた。
祖父に直に渡したくて、部屋を尋ねたが、いつも大叔父の差し向けた衛兵に阻まれて渡せずじまいだった。
これは不正の証拠。
不正どころではない。大犯罪の証拠。
防がなくては。
多くの人々のために。
私たちは、命をかける。
生きるにせよ、死ぬにせよ。
「俺だ、入るぞ」

焦茶のマントを羽織った、それでも分かる程に筋骨たくましい青年が入ってきた。
「メル兄様」
「もう時間がない、荷物はまとめたか」
「もちろん」
「すぐに出るぞ、行き先はヘリムの砦だ」
青年は暖炉の隣の隠し扉を開けた。厩近くの倉庫へ繋がっている。
「俺が先に行く」
青年は扉の奥へ入っていた。
「ちゃんとついて行くわ」
少女は返事をしたが、手の中の手紙を強く握り、暖炉へ投げ入れた。そして、隠し扉をくぐり、扉を閉めた。
部屋の中は、ごうごうという音ばかりが聞こえる。
炎の中の手紙は、ちりちりと音を立てたが、一向に燃えない。燃えないどころか、すべるように暖炉を飛び出し、花瓶を倒して水と花をぶちまけた。あえてびしょびしょに濡れながら手紙は本棚へ向かい、ぴたりと静止した。
本棚から1冊の分厚い本がふわりと空中に飛び出し、ぱらぱらとページがめくられ、手紙はページとページの隙間に滑り込んだ。本は再び本棚へ戻り、何事もなかったかのように暖炉の炎は燃え続けた。
病床の王と対立する王弟にして、彼女の大叔父たるジュベール公の怒号と罵声が城に響き渡ったのは、暖炉の火が消えた後の事であった。

記憶喪失少女リア

リアは街の噴水に腰掛け、辺りをきょろきょろしていた。街は噴水を中心に作られていて、周りの建物は真っ白なしっくいで作られている。沢山の宿屋、レストラン、喫茶店、布屋に服屋、装飾品やお菓子の露店。カラフルな屋根に、旗や置物や花が飾られて、目にも楽しい。人々も多くが笑顔で、街は活気がある。

街に住んでいるらしい少女が、リアを一瞥して、恋人らしい青年のところへ掛けて行った。少女の低めのヒールが石畳にぶつかって軽やかな音を立て、かわいらしいリボンで結われたポニーテールが揺れる。

街ってにぎやかだ、とリアは思った。

リアもまた、相方を待っていた。恋人ではないけれど。

「お待たせ！　結構高く買ってもらえたよ」

手を振りながら、人の良い笑顔で駆けてくる青年。村長の孫のハリスだ。村長そっくりの縮れた黒髪に、茶色の目。村のおばさん方に大人気。優しくて力持ち、ただしちょっと頭が悪い。

「問屋のおやじが、くれたんだ」

「ありがとう」

手渡されたのは三角形の揚げ菓子だ。

「一休みしたら薬屋に行こう。そのあと荷馬車を引き取って、村へ帰ろう」

「うん」

私はハリスが問屋に行っている間、ずっと休んでいたんだけど……一人で薬屋に行くのは、ちょっと怖いし。リアはそう思い、揚げ菓子をかじった。カリカリふわふわした皮の中から、蜂蜜とチーズのクリームがとろりと出てきた。ハーブの香りもする。

「うん、おいしい。あ、リアの方はチーズだ」

「ハリスのは違うの？」

「俺のは芋と魚。いる？」
「ううん、いいよ」
街って贅沢だなぁと思いながら食べていると、目の前の役所から人がわらわらと出てきた。ロープを張って、なんだか物々しい。
「君たち、危ないからあっちへ行っていなさい」
はげ頭でちょびひげのおっさんが、茶色いニットベストを着て、汗を拭きながらリア達の方へ走ってきた。
「分かりました。行こう、リア」
「うん」
２人で花屋の前まで移ると、役所の人が警笛を拭き始めた。白と赤の旗も振ってる。ごうん、ごうん、という音がして、空から、ゆっくりと何かが降りてきた。
「すごい、飛行艇だ。俺、初めて見た」
ハリスが揚げ菓子の入っていた袋をぐしゃぐしゃといじった。
「きっと貴族身分の人だ。なんだろう、視察かな」
リアはハリスの言葉がほとんど聞こえていなかった。降りてきた人と、目が合ってしまったからだ。
光を吸い込んでいるようなその人。金の髪、青い…ちがう、紫色？
この色を、雰囲気を、知っている気がする。
「マグニフィセント」
リアは知らぬうちに呟いていた。
その人は驚いたような表情をして、役人に何事か告げると、ふっと微笑んだ。

役所の応接室で、その人はくつろいでいた。
茶色のベストのおっさんに「くれぐれも失礼のないように」と言われ、すっかり緊張したハリスとリアは、椅子に慎重に腰掛けた。
「どうも、はじめまして。僕はアリー。君は？」
ソファに寝転んだまま、その人は言った。ハリスは息を勢いよく吸って、むせた。

「すみません、失礼しました。ハリスと、リアです」
「はじめまして」
リアがお辞儀すると、アリーは起き上がった。
「ここのソファは固くて、お昼寝向きじゃないね。さて、君、自己紹介して」
「は、はい！　自分はここから更に東にあるココ村出身で、この街へは村でとれた野菜とか果物とかの加工品を売りにきました。明日の朝街を発つ予定です。えっと、自分は村長の孫で、村の商品を売りにくる役です」
「ふーん、リアちゃんは？」
「リアは、半年くらい前から村に住んでます」
リアの代わりにハリスが喋った。
「春祭の最中に、空から池に落ちてきたんです。本当です。出身地も家族もほとんど覚えていないので、子どものいない、鳥だけが家族みたいなばあさんの家で一緒に暮らしてるんです」
「そっかー。大変だったね、リアちゃん」
「村の皆さんが優しいのでそれほどでは」
リアは素直に言った。
「リアちゃん、覚えている人の名前、教えてもらってもいいかな？」
リアは息を吸って、天井を見た。
「名前は覚えてないんですが、両親は亡くなって、祖父と暮してて、兄が3人いたと思います」
「あの、アリー様は、貴族身分ですか」
ハリスが身を乗り出した。
「そうだよ？」
興味なさそうにアリーが返事をしたが、ハリスは続けた。
「実は、リアが落ちてきた時に下げていた鞄に、宝石箱が入っていたんです。その中に、沢山の宝石と、お姫様がつけるような髪飾りが入っていて……」
「それは村にあるの？」

「それが……村に泊まった旅人が持ち去ってしまったんです」
「あーそう。残念だなぁ。でもまあいいや」
アリーは立ち上がった。
「パリス」
「ハリスです」
「失礼。ハリス、僕の弟がイストベルクで医者をしているんだ。記憶喪失の患者も引き受けているから、リアちゃんに弟の治療を受けてみてほしい。弟は魔法医なんだ。どうかな、リアちゃん？」
笑顔で、リアを振り向くアリー。
「治療費を払えるだけの財を、持っていません。村の方にも迷惑はかけたくないんです」
リアは深刻に思った。魔法医なんて、とんでもなく高額な治療費を請求してきそう。
「大丈夫、僕が持つから。困った人を助けるのも、貴族の使命なんだよ」
「……」
「じゃあ、お手伝いをして、それで払うって言うのは？　イストベルクは知ってるよね？　大都市だから、賃金も高い」
「すごい！　リア、行ってきなよ。きっと、家族も心配してる。記憶を取り戻して、会いに行ったほうがいい」
ハリスはリアの手を握って、目を見て言った。家族４世代が暮らす家に育ったハリスは、家族の温かさはかけがえのないものだと思っていた。
リアははっきりと感じた。温かく優しいハリスなら、きっと、子どものいない、あのおばあさんの面倒も見てくれる。村の人たちも、皆いい人だし。
「……じゃあ、おばあさんのこと、お願いします」
「おう、まかせてくれよ」
リアはハリスの手を握り返した。
「じゃあ、そう言う訳で僕とリアちゃんはイストベルクに行きます。

ここの裁判については後任者をよこすねー。じゃ、パリス」
「ハリスです」
「あーもー僕だめだね。あははー。で、ハリス、君のことは村まで僕の飛行艇で送るよ。ついでに、村へ僕のうちから農耕馬と農機具を少し、あと、若手を何人か派遣するよ。君の村の農産品は人気があるけど、若い人足りないみたいだし。できれば、僕のうちに、君のところで作ってる果物が届くようにしたいからさー」
アリーは早口で一方的に言うと、立ち上がってハリスに握手を求めた。
「あ、ありがとうございます」
「じゃあ、早速出発しよう！」

そして、リアは初めての飛行艇で初めての乗り物酔いに苦しむのだった。

執事アドラー

広い部屋は白を基調に、ピンクと緑とオレンジで彩られていた。大きなベッドは天蓋付で、ガラスの扉がついた本棚や、ティーセットの飾られたキャビネット、白い机と椅子には金細工。バスルームは全面鏡張りで、バスタブは猫足だった。

くぅ…

昨日の夜に見せられたのを思い出しているうちに、リアのお腹が情けない音を立てた。もうこれ以上は鳴けない、というように。

リアは目を開けて、いつもの部屋でない事を改めて実感した。今までの数倍やわらかいベッドの上で布団にくるまっていたかったけれど、さすがに、起きなければ。

顔を洗って、クローゼットの中から適当なものを見つけて着てみた。

モスグリーンのベーシックなワンピース。

まあまあかな。

鏡の前で思った時、コンコン、と扉がノックされた。

「失礼致します。おはようございます。アドラーでございます」

入ってきた執事は、リアを見て息をのみ、天井を仰いで眼鏡……

いや、目頭を押さえた。

「完ッ璧！！」

どうやら、リアはアドラーの予想を裏切る服を選択し、かつ予想以上にアドラー好みの少女に見えたらしい。

「わたくしはリア様ならこちらのようなお召し物と思っておりましたが」

アドラーが手で示したのは装飾の多いごてっとした古めかしいドレス。

「ああ素晴らしい、何て素晴らしい少女を連れてきてくださったん

でしょう！　奇跡！」
　アドラーは長い栗色の髪を振り乱し、自分が推薦するドレスを抱きしめて悶えている。長身で美人、メリハリのある体型のうえ、燕尾服も美しく着こなしているのに。
「あの、朝ご飯は……」
　遠慮がちに尋ねると、アドラーは眼鏡を直しながら答えた。
「ただ今ご案内します。朝食は大食堂で食べることになっておりますから」
　アドラーは重々しい扉を片手で開けた。
「本日のメインはオムレットですよ」
　卵料理は、村ではごちそうだった。
「楽しみです」
　リアが言うと、アドラーは嬉しそうに微笑んだ。
　ふわふわの絨毯を踏み踏み廊下を歩む。壁紙も繊細な花のパターン、天井まで絵が描かれ、所々に大きな花瓶に花が飾られている。大きな窓からレースのカーテン越しに朝日が差し込み、飾られた絵画がぼんやりと見える。これは泉の妖精と花の妖精の対話が描かれている。さっきのはユニコーン。
　素敵な絵が沢山ある、とリアは思った。
　廊下を右へ右へと行くと、大きな扉に突き当たった。ガラス張りで、レースのカーテンがかかっている。
「失礼致します。リア様をお連れしました」
　アドラーが言うと、中からどうぞという声が聞こえた。内側から扉が開いた。
　中は天井が高く、様々な植物が根を張っていた。植木鉢ではなく、地面から。大きく長いテーブルと椅子を置くスペースだけは、モザイクタイルが敷かれていた。
「おはようございます」
　リアが挨拶すると、テーブルについていた2人が立ち上がった。
　メインの席にいるのは30歳くらいの男の人で、金の髪に緑の瞳

だった。　７歳くらいの少年がどこかで見覚えのある、金髪と青い瞳。
「おはよう、リアちゃん」と少年。
「アリーから聞いてるよ。自己紹介するね。ぼくはアリスティド。アリスって呼んでいいからね！」
　にっこりと笑う少年は、天使みたいに可愛らしかった。水色のブラウスに、白いタイ、キュロット風のパンツは紺地に金のストライプ。
「こっちはクロード」
　緑の目を伏せながら、軽く会釈した。長身で、面長、　ぴしっと分けられた前髪、物静かな雰囲気。アリスティドと少し似ている気がする。白いシャツに黒いパンツ、装飾も何もなくシンプルだ。
「この屋敷はクロードの病院の一部なんだ。後で診察してもらってね！」
「よろしくおねがいします」
「じゃ、朝ご飯食べちゃおう」
　二人が座ったので、リアも慌てて席に着いた。
「いつも朝食は軽めなんだ。今日はスープと」
「ニンジンとカブのコンソメ仕立て、フラワーサラダ、マロンのドレッシング、シャンピニオンオムレット、パプリカクリーム、ベゲットパン、スウィートパンプキンです」
　アドラーが銀のトレーでリアの分を運んできた。ニンジンとカブのスープだ。
「美味しそう」
　リアは手を合わせた。
「いただきます」
　アリスティドとクロードは顔を見合わせ、笑顔で、リアと同じように手を合わせた。
「「いただきます」」
　朝食は、リアのいた村の話でおおいに盛り上がった。

診察室はアイボリーで統一されていた。季節の花が沢山飾られている。部屋の中央、一段高くなったところに、クッションがいくつか置かれている。その台自体も柔らかいようだ。
「あれが椅子だ。座って待っててくれ」
クロードは白衣を着ると、板に紙を置き、クリップで固定した。鉛筆でさらさらと何か書いている。リアの方はほとんど見ない。
無愛想な人だ、とリアは思った。リアが座ると、クロードはその隣に、少し間をあけて座った。
「名前と年齢、好きな食べ物を教えてくれ」
「ファミリーネームは覚えてません。名前はリア。多分１６歳。好きな食べ物は栗のコンフィチュール」
「どうしてそれが好きなんだ？」
「甘くて、美味しいから。一緒に住んでいたおばあさんが、名人なんです」
「今度この屋敷にも届けてもらうようにしよう。楽しみだ」
クロードは少しだけ、笑顔になった。ほんの、少しだけ。
「それでは、これから検査を始める」
少し緩んだリアの気持ちが、また一気に緊張した。

「アドラー」
「なんですか」
食堂で、のんびり食後のお茶を飲んでいるアリスティド。そしてクロスを外したテーブルを拭いているアドラー。
「リアちゃん可愛いでしょ？」
「ええ。本当に可愛い。可愛すぎてもう、動悸が止まりませんよ」
「リアちゃんの今朝の服アドラーの趣味じゃないよね？　アドラーなら重たーい生地にフリルたくさんのドレスとか、白いワンピース着せそうだもん」
「本当は着せたかったですよ！　でもわたくしが行く前に着終わっ

ていらしたので……」
「ぼくなら巷で話題のアニマルファッションをさせたいなー蛇とか！」
「リア様は何でも似合いますけど、遊びが過ぎると大変ですよ、特にフォローが」
「そうだねー」
「リア様は大事になさってください。今まであなたが見つける事ができなかった珍品ですよ」
「物みたいに言うなよアドラー。君じゃないんだから」
アリスティドは自分のティーカップに自分でお茶を足した。お茶の滴がはねて、テーブルが汚れた。
「わたくしだって大事にしてください。わたくしは弱く儚いのですよ。瞳は宝石、髪は絹、肌は白磁。ぶたれたら終わりです」
「そんで、君の機嫌を損ねた人は末代まで呪われるんでしょ？」
「末代までですめば、幸運ですよ」
アドラーははねたお茶を拭き取りながら、形のよいの唇で微笑んだ。

執事アドラー（後書き）

好きなキャラクターです、アドラー女史（準レギュラー）。レギュラーメンバーを差し置いて、堂々と第2話目のタイトルを奪取しました。

あに？

正午、食堂に現れたリアは、カチューシャを着けていた。目立たない黒いカチューシャだ。
「あっ、カチューシャ」
既に席に座っていたアリスティドが目を輝かせた。リアは頭を気にしながら恥ずかしそうに座った。
「アリス君、目がいいんだね。頭の中の活動を調べる装置らしいの」
このカチューシャはさっきクロードに装着された装置だ。なんでも、頭の中がどういう時にどういう働き方をするか記録できるらしい。
リアにはどういう物だかさっぱり分からないけど。
「あーだから黒なんだ。ぼくは赤とかピンクとかオレンジとかがいいと思うなー」
「女の子っぽいのは、あまり得意じゃなくて」
どちらかというと、スカートよりもパンツが好きなんです……とリアは言いたかった。
「そっかーじゃあ、刺繍は？　金糸で刺繍してあるのとか。医療用でもせっかくだからさー」
クロードが朝と同じ格好で入ってきた。黒いパンツに白いシャツ。
「兄さん、勝手にいじらないでくださいよ」
「えーいいじゃーん少し位」
「…おにいさん？」
クロードが、がたんと椅子に座った。
「そう言えば今朝、年齢は言ってなかったな……」
「そうだっけねぇ？」
アリスティドが両手でほおづえをついて、リアを見た。
「もう一度、自己紹介しまっす！　はい、クロードから」
「クロード＝レム＝ヴィズィオネル。今年で多分２６歳」

え、えええ！！
嘘だ３０代でしょう！！！！
「ぼくはアリスティド＝リュー＝ヴィズィオネル。好きな物はお菓子と紅茶と蜂蜜！　今年で多分３０歳でーす」
こらこらこらこら、嘘はよくない！
「え、その、冗談……」
「それがね、冗談じゃないんですよ」
グラスに水を注ぎながらアドラーがため息をついた。
「この性悪な館の主は人を騙くらかしてからかうのが大好きなんですけど、これだけは本当なんですよ。もうそろそろオトナになってほしいんですが、本人がお子様の格好が大好きで大好きで、ちょっと趣味が危ないかなって言うところもあるんですけど、まあ館の主ですから誰も文句も言えず……」
「世を忍ぶ仮の姿なの！　これは！」
７歳児がばんばんとテーブルを叩く。頬が赤くて可愛い。
「お嫁さんもらわないで悠々自適な独身貴族を貫かんとしているのに、まーイロゴトに頭がイッちゃってるおっさんたちが、はた迷惑な縁談ばーっかり持ってくるんだよ！　それが鬱陶しいからこういう感じで過ごしてるの！　このぼくの苦悩がわからないかな！？　ぼくは健全！　健康な男子です！」
アリスティドは言い切って、豪華な彫刻の柔らかい椅子にふんぞり返った。
そんなこと、こんなに可愛らしい男の子に言ってほしくない…。
リアはちょっと切なく思った。外見が可愛くても、中身が伴わないと残念な印象を人に与えてしまうものなのね……。
「自分は何もしていないが、兄さんが子どもに見えるのは、魔法で姿を若くしているせいなんだ」
クロードが水を一口飲んで言った。
「自分も、兄さんも、この国では高位の魔法使いだ。政治的な地位がそれなりにあって、魔力も相当強い。特に兄さんは、この国で一

番魔力が強い」
「そうそう」
アリスティドが頷く。
「兄さんの目の色は独特な色をしているだろう？　マグニフィセントという血筋の証拠で、この色はマグニフィセントブルーとも呼ばれる。これは男にのみ継承されると言われている」
「マグニフィセントって、聞いた事だけありましたけど……」
「そうか、一般人には国宝級魔法使いという呼び方の方が馴染んでいるから、リアは魔法に縁のある家の育ちなんだな」
クロードはどこからか取り出した手帳に、ペンでさらさらと書き付けていた。

昼食を食べ終わった頃、アドラーが思い出したように言った。
「そう言えば、昼食中にリア様の荷物が届きましたので、リア様のお部屋に運んでおきました。なんでも、同居なさってた方が急に亡くなって、その方の遺品も一緒に入っているとか」
「えっ」
おばあさんが、亡くなった！？
「葬儀は今日の昼過ぎからですので間に合いませんが、一応お悔やみの手紙は定型通りお渡ししておきましたよ」
「あ…ありがとうございます」
「重ねてお手紙を出すようでしたら、わたくしが手続き致しますので」
アドラーが優しく微笑んだ。
「ありがとうございます」
リアは、アドラーの心遣いに心底感謝した。そして、昼食後の時間は届いた荷物の整理にあてる事に決めた。
挨拶をして食堂を出ると、植物のある清々しさや甘い香りは一切しなくなった。かわりに、しんと静まり返った屋敷の広さが、廊下の向こうから迫ってくるようだった。

記憶を辿って、部屋へ向かう。朝は右へ右へと来た。だから、今度は左へ左へまがって行けばいい。リアはドキドキしながら、柔らかな絨毯の上を歩き始めた。

ここだ、と思って開けた扉の先は、荒れ果てた部屋だった。閉め切られたカーテンは裂け、壁の絵は落ち、椅子は放り出されて足が折れ、机はひっくり返り、花瓶は割れ、花は干涸び、酸っぱくて臭い、妙な臭いが充満していたので、リアはすぐに扉を閉めた。

ところが、部屋の中から聞いた事のある声が聞こえた。

「リーアッ！」

リアを呼ぶ声。村でおばあさんが飼っていた鳥と同じ声。

「ピピ？」

「リーアッ！　ダーシーテッ！」

リアは再び扉を開けて、異臭の中を突き進み、カーテンを開けた。細かい埃が立ち昇り、光をわずかに遮る。

ベッド脇に落ちているいびつな形の鳥かごの中に、見知った白い鳥がいた。尾は長く、くちばしは黄色く、目は黒、目元に薄紅色、黒い脚に、エメラルドグリーンの爪。おばあさんは何て言う鳥なのか分からないのよねぇ、と言っていた。

白い鳥は歪んだかごの中を飛び移りながら、ハヤクハヤクと急かした。　しかし、どうしてか、かごにの出入り口が開かない。仕方ないのでそのまま持ち出すことにした。

「ピピ、どうしてここにいるの」

「リア、ダーイスキ！」

「ねえ」

「ツカマッタ！」

ピピはカッカッと鳴いて、リアの後ろを見つめた。振り返ると、黒い何かが後ろに立っていた。

あに？　（後書き）

アリスなのに男の子。まあよくあることです。

おとうと。

黒いマント、黒いローブ、ぼさぼさと伸びた黒い髪、黒い瞳、目の下の隈、不満そうなへの字の口、そしてツンとする臭い。部屋があまり明るくないので男とも女とも分からないが、身長はアドラーと同じくらいだろう。

リアは鳥かごを抱えて立ち上がった。

「この鳥、私の恩人の鳥なの。鳴き声が聞こえたから勝手に入ってしまったんだけど、すぐに出るから」

リアはその人物の横をすり抜けようとした。しかし、その人物は鳥かごをがしっと掴んで通さなかった。

「この鳥は魔鳥だ」

男の声だった。

「魔鳥は素人が愛玩動物として飼うわけにはいかない凶暴な生き物だ。それに、この魔鳥を使う事で、世界が救われる。ここに置いて行け」

「この子はもともと農村のおばあさんが飼ってたの。全然凶暴じゃないし、むしろ賢いくらいよ。変な冗談はやめて」

「洗脳されているな……」

「あなたこそ洗脳されてるんじゃない？」

「俺はなんともない！」

怒鳴られた。リアはむっとした。

「手を放せ」

「いやよ」

「放せ！」

「嫌！」

男の目の色が変わった気がした。リアは男を睨みつけたまま、思いっきり、男の足をかかとで踏みつけた。

「っ！？」

リアはかごを奪い取って走り出した。廊下へ出ると空気がはっきりと違う。ああ臭かった。
「待て！」
振り返ると、男が追いかけてくる。やばいやばいやばい。そうだ、食堂へ行けばアドラーがいるはずだ。アドラーならなんとかしてくれるはず！

リアは曲がり角を右へ、右へ、右へと曲がった。
ヒールに高さのある靴でしかも柔らかい絨毯は走りにくく、鳥かごを抱えているためリアの足は普段より随分遅かった。服にあわなくても村から履いてきたブーツにすればよかったと後悔した。
ガラスの扉が見えた、と思ったとき。
ぐっと足が上がらなくなり、バランスを崩して、リアはうつ伏せに転んだ。顔をあげたとき、鳥かごがガラスの扉の手前に落ちたのが見えた。ピピが暴れている。起き上がろうとするとなんだか腰とお腹の辺りが重い。振り返ると黒いローブを着た金髪の男が、リアのスカートを握りしめていた。
「うっわぁ！　アドラー大変だよ！」
ガラスの扉の向こう、食堂からアリスティドが顔を出していた。
「リアちゃんがギルに襲われてる！」
「なんですって！　あのろくでなし！」
アドラーが鳥かごを蹴っ飛ばして走ってきた。男は荒い息をしていて、もう動けないといった表情をしていたが、一瞬後には白目をむいていた。
「わたくしの可愛いリア様にー！！」
と、言ってアドラーが男にバックチョークをかけていたのだ。男の喉を締め上げているアドラーの腕が意外と筋肉質だ。
「大丈夫？」
アリスティドがクッキーを食べながらリアを覗き込んでいた。
「うん、怪我はしてないから……」

リアが立ち上がると、アリスティドがリアの足下を見て、「ありゃ」と言った。
「走りやすい靴を用意しておくね」
リアは、そう言えばこの人は自分より年上だった、と思い出した。
「……あ、ありがとう」
男はほどなくしてぐったりしたので、アドラーが手際よく縄で縛り上げ、食堂に運んで植えてある巨木に縛り付けた。
「リア様もとんだ災難でしたわね」
「ほんとにさ！　この家に来て2日目でギルに会うなんて」
この縛り上げられた人物はギルというらしい。ギルは金髪が脂でべたべたと張り付いており、血色も悪い。
「さっき、黒目黒髪の男の人と会ったんですけど……このギルって人と同じような格好をした……」
アリスティドとアドラーが顔を見合わせた。2人で肩をすくめると、アリスティドはリアの手を引いて、さっきリアが昼食を食べた席に座らせた。アドラーが紅茶の入ったティーカップをさっとテーブルに置いた。テーブルにはクロスが掛けられていなかった。
「説明不足でごめんね、リアちゃん」
アリスティドは自分の席に座って紅茶を一口飲んだ。
「あれはギルバートって言って、ぼくらの一番下の弟なんだ。髪と目の色が気に入らないらしくて、魔法で黒目黒髪に一時的に変えてるみたい」
「魔法って、そんな事もできるの」
アリスティドは勿論、と言った。
「ぼくだって、見た目はリアちゃんより下でしょ？」
「あ、そっか」
「そう、同じ事。そんでね、魔法がとけると元に戻るんだよ。単純な魔法だと、怒ったり、泣いたり、気絶したりすると、魔法がとけちゃう。……あと、ギルの場合、あの部屋からでると魔法が無効になるんだ」

「へぇ……」
「今、ギルは魔力が封じられているから、その封じの魔法を弱める魔法を部屋に施してるんだと思う」
「へぇ……」
なんだか面倒くさい弟さんだなぁ、とリアは思った。
リアのこの半年の生活では、魔法というものが不必要だったからだ。村では、祭の時にともされる灯りが魔法で作られたものだったりするだけで、生活する上ではとんとお目にかからなかった。
「魔法って色々できるんだね」
リアが言うと、アリスティドはそうそう、と頷いた。
「万能じゃないけど、仕組みを理解すれば色々な応用が考えられるからね。便利だよー」
アリスティドは両手を広げると、右手に炎、左手に氷を作り出した。一瞬でだ。
「わっ」
「これは初歩。この二つを合わせるとね」
手の平を平行に構え、ゆっくり近づけると、鋭い破裂音がして、周りにもやができた。
「温度差で水蒸気を作るんだ。大概無害だし、目くらましとかによく使うね、僕は」
ぱたぱたとアドラーが銀のトレーで風を起こした。
アリスティドが座っていたところに、確か4日前に街で出会ったあの人が居た。
「アリス君……あれ？　アリーさん？」
「覚えててくれたんだ！　嬉しーなー！」
青年はにっこり笑って、細い指でティーカップを持ち上げた。
「えっと……魔法？」
「そ。そういうこと」
紅茶を一口飲んで、アリー、つまり青年姿のアリスティドは満足そうに頷いた。

おとうと。（後書き）

主人公は若干鈍感、まあ、よくあることです。アドラーさんが鳥かご蹴っ飛ばしちゃったのは、許して上げてください（´∀｀）バックチョークは彼女なりの愛情表現です。

三兄弟

食堂という名の温室には、ガラス張りの天井から柔らかな午後の光が降り注ぐ。緑色の中に時折黄色やオレンジが混じる光が、ティーセットの上で揺れる。アドラーが窓を開けたようだ。

「じゃ、つづけてこの家の事も説明するね」

青年姿のアリスティドは、少年姿の時と変わらない様子で話しを続ける。

「僕らは一応全員魔法が使えるから、僕らの家は、魔法で自動制御されているんだ。使用人はアドラーひとりだけ。パートのおばさんもいないよ」

パートのおばさん？

パートってなんだろう？　何かの部分？

リアはよくわからないけど、とりあえず頷いておいた。きっと貴族の屋敷では、使用人が1人なんて、普通じゃないんだろうな、と思った。

「今いる住人は、僕、クロード、アドラー、リアちゃんと、あとあそこに縛り付けられてるギルバート。公的な記録によると、僕とクロードとギルバートは兄弟らしい」

「らしい……？」

アリスティドは持ち上げたティーカップを降ろした。

そういえば、という表情でリアの事を見た。

「リアちゃんは記憶がないんだっけ？　じゃあ、失われた３０年のことも知らない？」

リアはまったく心当たりがなかったので、分からないです、と答えた。

「レコードのことも知らない？」

「蓄音機の……」

「あーそれもレコードだけど、それじゃないレコードのことなんだ

よねー」
アリスティドは指先で頬を掻いた。
少しの間思案して、ゆっくりと喋り始めた。
「この王国には、独立系情報収集体（レコード）と呼ばれる記録書がある。レコードは、唯一無二の公的な出来事の記録書で、複製は存在しない」
まるで教科書みたいだと、リアは思った。頷いて相づちを打つと、アリスティドは続けた。
「レコードには、国王とその縁者の身に起こった事が自動で記録される。僕は国宝級魔法使いの血縁、しかも直系だから、レコードには僕が生まれてから死ぬまでに、僕が起こした事、関わった事が記録される。他の大貴族も同様。だから、レコードには1年間に膨大な記録がなされるんだ。ところが」
アリスティドが一呼吸置いた。
リアも深く呼吸した。
「カルロス王齢歴６８３年の中頃から、７１３年の終わり頃まで……大体３０年の間、記録がほとんどなされていない。そして、その３０年間は他のあらゆる記録も、人々の記憶も、不完全なんだ」
「他の記憶も、記録も？」
「そう」
アリスティドは頷いた。
「例えば、納税記録、居住登録。毎年行われてるんだけど、どちらも白紙が大量に保管されていたんだ」
「白紙が……？」
「一部、記載があるものもあったから、もしかしたら間違えて保管用じゃないインクを使ったのかもしれない。ところが、民間の個人的な記録、例えば商店の取引記録とか日記とかね、そういうのも、その３０年間だけほとんど存在していないんだ」
「それは変……じゃない？」
「だよね、普通そう思うよね。僕らは、何かの魔法かその影響なのかもしれないと考えてる。まぁ、国有財産を私的流用とかするよう

なレベルの連中に、そんな大規模な魔法が使えるとは思ってなし、その必要も無いはずだけど。今のところ、詳しく分からないから公的記録の白紙は全てそのまま保管してあるんだ」
　まったく場所をとって仕方ないんだよね、とアリスティドは唇を尖らせた。
「それで、話しは戻るけど、カルロス王齢歴７１５年前までの３０年間、記録や記憶があやふやで何が起こったのかよく分からないんだよね。さてリアちゃん、僕は何年生まれでしょう？」
　アリスティドが紅茶を飲んで、アイスボックスクッキーをつまみながら聞いてきた。
「今は、７３２年……で、アリス君は３０くらいだから……７０２年生まれ？」
　アリスティドは嬉しそうに頷いた。
「リアちゃん、暗算できるんだね」
「え？　あ、まあ……得意じゃないけど」
「僕も苦手ー暗算嫌いー」
　そ、そうですか……。
　リアは何とも言いようがないので、紅茶を一口飲んだ。苦い。
「それで、えーと、僕らは失われた３０年の最中に生まれた。だから、出生記録がなくて、父親や母親が不明確なんだ」
　あれ？
　記憶や記録が曖昧なら、どうやって兄弟だって分かったんだろう？
「両親が分からないってなると……」
「兄弟かどうか分からないよね。ただ僕らは幸いな事に、役所に提出された居住者届出が存在した。僕とクロードとギルが兄弟として申請されていたのが発見されたから、僕らは兄弟として暮しているんだよ」
　アリスティドがクッキーに手を伸ばした。赤いジェリーが宝石のように煌めく、絞り出しタイプのクッキーだ。
「本当に、ひとりぼっちじゃなくて良かったよ」

降り注ぐ光にクッキーをかざして、アリスティドは小さな声で呟いていた。
ひょいと口に入れたクッキーは噛めば軽い音がしたけれど、ジェリーだけがねっとりと口の中に残った。アリスティドは紅茶でジェリーを押し流して、話しを続けた。
「レコードを含めた多くの記録が完全回復したのが７１５年。ネルソン王の時代で、７１４年の末日、ネルソン王の妻メルバが亡くなった年なんだ。メルバ王妃は子どもとともにこの屋敷に滞在中、亡くなった」

三兄弟（後書き）

絶妙に反発し合ってまとまってくれない3兄弟。わりと食べ物の出現率が高いのは、仕様です。

王子様

「メルバ王妃は子どもとともにこの屋敷に滞在中、亡くなった」
アリスティドの何気ない言葉に、リアは一瞬固まった。意味が分からず、言葉の意味を頭の中で確認しなおしていた。
「この、屋敷で……？」
アリスティドは頷いた。
「庭にあった離れが爆発して亡くなったそうだから、この建物の中で亡くなった訳じゃないよ。まあ、魔法に失敗して死んでしまう事って、複雑で煩雑な複合魔法じゃわりとよくあるんだけどね……。それで、メルバ王妃の筆跡で、僕とクロードが王妃の養子であること、僕ら3人が兄弟であることが書かれた書類が届出されてたから、僕らは兄弟として暮しているんだ」
アリスティドが紅茶を飲んだ。
「じゃあ、3人は王族なんですか！」
「まあね」
素っ気ない。僕にとってはどうでもいい、という雰囲気だ。
「重要なのはね、ギルがメルバ王妃の子どもだって事だよ。多分ギルの父親はネルソン王だね」
アリスティドが自分のカップに紅茶を注ぎ足し、飲んだ。
リアも紅茶に口を付けた。さっきより少し苦い。
「そう、だからギルは、ネルソン王の嫡子として王位継承権がある。これは現在、公に認められているんだ。僕とクロードにはないけどね」
リアは今一度黒尽くめのギルバートを見た。あれが、王様候補。
「っていうことは、王子様、ってことですよね」
結構イメージと違う。
王子様って、もうちょっとこう……紳士的な、貴公子然とした人だと思ってた。

リアは冷めた紅茶を飲み干した。アリスティドはリアのカップに紅茶を注ぎながら、話を続けた。
「そうなんだけど、王子様ってガラじゃないよねー。どちらかっていうとドラ息子とかの方が似合う気がするよねー」
「はい、全くです」
リアは素直に頷いた。
「ただね、ギルは数年前に呪いを受けて、ほとんど魔力を封じられてしまったんだ。それまでは国のあらゆる事を知りたいって言って、色々な事を勉強してた。視察に行ったり、討論会を開いたり、色々頑張ってたのに……」
少し悲しそうな表情をするアリスティドを、リアは不思議に思った。
「魔力を封じられると、何かあるんですか。魔法を使わなくても、暮している人は大勢いますけど……」
「この国の王様の第一の仕事って何だと思う？」
リアは目を泳がせた。ピンと来ない。
「国民が飢えないようにする事？」
「それも大切。もっと大切なのは、この国にはられた結界を維持する事。結界がなければ、僕らは外界の瘴気にあてられて瞬く間に死んでしまう。結界の維持ができるからこそ、王様は王様と呼ばれて、国民から大事にされるんだ」
アリスティドはココアクッキーに手を伸ばした。
「結界の維持には、王家直系の魔力が必要なんだ」
「じゃあ、魔力が封じられたままだと……」
「王様にはなれない」
「……」
「今は、ネルソン王の弟のブライアン陛下が頑張ってる。だけど、彼はもともと体が弱くて魔力が少ない上、５０歳も越えたはずだ。その次の世代は、病死や事故が相次いで、あとはギルしかいない」
アリスティドはクッキーをかじった。紅茶を飲んで、一息つく。

「ギルが王様になりたいって言うなら、僕は呪いを解く努力をするよ」
「でまかせ言うなよ」
ギルバートが肩で息をしながら、アリスティドを睨みつけていた。
「信用できるか、こんな奴」
そう言って、ギロリとリアの方を見た。
「さっきの魔鳥を早く寄越せ！」
リアは何も言わなかった。
よくわからないけれど、可哀想な気がした。
リアの肩に、ピピが止まった。
「ピピ、契約済、モウ、魔力ナーイヨ？」
ギルバートは悔しげに歯を食いしばった。
「くそっ」
「リアちゃんの鳥？」
アリスティドがピピを見ながら尋ねてきた。
「村でお世話になっていたおばあさんが飼っていたの。ピピは村の人とはちっとも仲良くしなかったんだけど」
「へぇ、そうなんだ。ピピは人の言葉がわかるんだ？」
アリスティドが言うと、ピピはリアの肩の上で足を踏み替えた。
「モチロン、ピピ、天才」
「僕、アリスティド。よろしくね」
「ピピ、ピネルピネラ！　ヨロシク、ネッ！」
ピピはテーブルの上に舞い降りると、アイスボックスクッキーをくわえて飛び去った。アリスティドはピピを見送ってリアを見た。
「ピネルピネラを飼うなんて、すごいおばあさんだったんだね。魔女？」
「魔法は使ってなかったから、そこまではちょっと」
「会ってみたかったなあ」
ほおづえをついてココナッツクッキーをつまんだアリスティドが、独り言のように呟いた。

「新しい飛行艇作ったんだろ。それに乗って会いに行けばいいじゃん」
ギルバートが、縄をほどこうともがきながら言った。
リアは、会いに行けたらすごくうれしいな、と思った。
アリスティドは、こいつは知らないんだったっけ、と気付いた。
アドラーが、ギルバートのための昼食を持ってきた。
「僕の飛行艇も万能じゃないからね。さすがに亡くなった人に会いに行く事はできないよ」
縄をほどいて、ずかずかと席について、ゴブレットのオレンジジュースを飲み干し、　サンドウィッチにかぶりつきながら、　ギルバートは平然と言い放った。
「じゃあ、時をさかのぼって見るだけ見てくればいいじゃん。過去を変えなければ、過去に行ったって平気なんだろ？」
アリスティドが腕組みした。
「ギル、君、分かってるよね？　時を越える魔法はリスクが大きいんだよ」
「知ってる」
もごもごとパストラミサンドを頬張りながらギルバートが返した。
「知ってるなら、軽々しく言うべきじゃないでしょ」
「可能性のある選択肢を頭から否定するよりマシ。アドラー、オレンジジュース」
山盛りのサンドウィッチをがつがつと食べながら、しれっとした表情でギルバートが言う。アドラーがじゃばじゃばと荒っぽくオレンジジュースを注いだ。
「汚ぇー」
「汚いって言うのは、貴方みたいな異臭を放つ存在に対して使うものです。それ食べたらお風呂に入ってくださいよっ！」
アドラーが口を尖らせると、ギルバートは自分のローブの臭いをかいだ。そして、黙ってパストラミサンドにかぶりついたのだった。

王子様（後書き）

ＳＩＣ第１章、読んでいただきありがとうございます。
お待たせしました、ようやく少年と少女が出会いました。
ちなみにこの世界の入浴方法で、湯船につかるのはメジャーです。
首都から見て東北の方向にある山の麓に、地獄極楽温泉という温泉郷があります。
あははうふふ（？）な温泉話は、そのうちに。

林檎のタルト

翌日の夕方、甘い匂いが食堂を包んでいた。
アドラーが楽しそうにティーセットを運び、リアはエプロンを外して自分の“作品”を眺めていた。
「いいにおいー」
7歳児姿のアリスティドがとことこ、とテーブルに駆け寄り、椅子の上に立って、目を輝かせた。
「美味しそう！！」
「林檎か」
呟きながら、クロードも食堂へ入ってきた。今日は一段と前髪が整っている気がする。
「おばあさんのレシピで、林檎のタルトを作ってみたんです。村から林檎が届いたので」
「美味そうだ」
クロードはテーブルに近づくと、林檎のタルトを見つめていた。
「なあ、それ今食えるの？」
ぎょっとして、全員が振り返った。
そこには、ギルバートが、昨日とは随分違う姿で立っていた。髪の毛はべた付いていないし、ざっくりとではあるけれど金髪を後ろで結んでいる。それに、白いシャツに黒いパンツという、クロードと同じような服装。いくらかサイズが大きいようにもみえるけれど、まるで、若手の楽団員か休憩中のホテルのボーイのような雰囲気だ。
「これから食べるつもり。アドラーさんがお茶の準備してくれたから」
リアが答えると、ギルバートは席次でいう4番目の席に座った。アリスティドが驚きに驚きを重ねた様子で、ゆっくりと椅子に座った。クロードも興味深そうに林檎のタルトとギルバートを交互に見て、席に座った。リアが席に着くと、アドラーは「テーブルが大き

すぎますから形式は置いておきましょう」と言って、温めたティーポットに茶葉と湯を入れ、タルトを取り分け始めた。
「少しいいだろうか」
クロードが皆を見渡して言った。
「こんなときに申し訳ない話なんだが、先ほど、団長から連絡があって、早急にあちらへ向かう事になった」
よく分かっていない様子のリアを見て、アリスティドが説明してくれた。
「クロードは、王宮医師団のうちの一人なんだ。王族の血とクロードの魔力は相性がいいらしいから、招集されたら行かなきゃ行けないんだよ」
「すごい！　王宮医師団ってことは、王様の病気を診るんですか？」
「王様も診るし、妃や王子、姫も診るらしいよ」
「叔父貴の体調が悪いなら、王宮に常駐してる連中で間に合うだろ」
金色のフォークを弄びながらギルバートが言うと、クロードはかぶりを振った。
「ブライアン陛下はお元気だそうだ。体調が芳しくないのは、王妃のジュディト様だ」
「お腹が随分目立つようになったらしいねー」
アリスティドは取り分けられた林檎のタルトを凝視している。
「兄さんのところにも噂は入っていると思いますが」
「まあねー。次こそ王子だって皆意気込んでるみたいだよねー。娘3人のジュディト様にとっては重圧だよねー」
「だからこそ早めにクラウンへ行きたいと思います。リア以外の今の患者の預け先も見つかったので、自分は今晩にもイストベルクを経ちます。兄さん達はどうしますか」
アリスティドは注がれた紅茶を飲もうとして、止めた。少し間をおいて、紅茶を一口飲んだ。
「うん。じゃあ、全員、今晩のうちにイストベルクを出発しよう。ぼくもそろそろ顔出さなきゃだし、リアちゃんを魔法学院のレゼン

先生に会わせてみたいし」
落ち着かなくてごめんねー、とアリスティドはリアに謝った。けれど、リアはむしろ、自分も一緒に首都クラウンへ行けるのが嬉しかった。やっぱり、首都という場所は特別だ。
「魔法学院って、魔法を教わる学校ですか？」
「魔法もだけど、その他にも色々ね。強い力を行使する者は同じ位大きな社会的責任を負うべきっていう、考えらしいよ。それよりさぁ、リアちゃん、食べていい？」
アリスティドが、上目遣いにリアを見た。金色のフォークで、林檎のタルトを指し示している。
「ど、どうぞどうぞ！」
「やったぁ！」
満面の笑みで、タルトを口に運ぶ。ギルバートも、待ってましたと言わんばかりの早さで食べ始め、クロードもほっとしたような表情でゆっくりとフォークを動かしていた。
「美味しい！　シナモンが入ってるんだねー」
「林檎を煮た後に結構入れました」
リアも一口食べてみた。シナモンの香りと林檎と蜂蜜の甘さが広がる。
「俺はシュトロイゼルより、カシューかクルミが乗ってる方が良い。カラメリゼしたやつ」
と、ギルバートが、林檎のプリザーブの上に散らしたそぼろ状のクッキーだけをすくい上げて言ってきた。
「ナッツ……レシピには書いてあったけど、ちょうどストックを切らしてたから、代わりにシュトロイゼルを乗っけてみたの」
「……じゃあ、ないなら、仕方ない」
ギルバートは再びタルトを食べ始めた。
実は、タルトの材料を集めている時、食料庫のナッツ類のストックケースだけが空っぽだったのだ。そのときのアドラーの様子を思い出して、リアはピンと来た。

あの時、アドラーは「まったく、もう！」と言っただけで、騒いだりしなかった。普通なら鼠の仕業かしら、とか言って他の食品も点検したりするのだ。皆の様子からして、ギルバートは皆と一緒に食事をしないのが普通。ナッツ類が空だったのは、きっとギルバートがこっそり食べきってしまったためで、アドラーはそれに気付いて、鼠かも、盗人かも、と騒いだりしなかったのだ。

すっきりしたと同時に、奥深い人たちだ、とリアは思った。

「リア、このレシピは村で一緒に暮らしていたおばあさんから送られてきたものなのか？」

クロードが半分程タルトを食べたところで尋ねてきた。

「はい。ちょうど村から届いた林檎があったので、せっかくだからと思って作ってみたんです」

「そうか」

紅茶を飲んで、クロードはひとつ頷いた。

「不思議だな。懐かしい味だ」

リアは少し嬉しくなって、少し寂しくなった。

おばあさんともっと色々話したかった。

おばあさんの林檎のタルトを食べてみたかった。

そしたらきっと、作るタルトの味も、おばあさんの味に近くなっただろうな。

林檎のタルトをすっかり食べきって、各人荷造りをする事になった。リアはあっという間に終わったので、アドラーの代わりにティーセットを片付けていたのだが、ふと、林檎のプリザーブを思い出した。林檎のタルトを作る時に、少し多めに作っておいたのだ。リアは林檎のプリザーブを琺瑯の容器に入れて蓋をした。また明日、みんなでこの林檎を食べたいな。

蓋をしてから、ギルバートの事が思い浮かんだ。

あの人、アリスティドさんやクロードさんとあんまり仲が良い感じじゃなかったけど、一緒に飛行艇に乗ってクラウンまでいくんだ

よね？　一人だけここに残るとか、言わない……よね？

日も暮れた頃。

リアはアドラーに案内されて、裏庭へ回った。木や草や花の多く植えてある普通の庭と違い、裏庭はほとんど地面がむき出しで、所々芝生が生えているだけだった。その真ん中に、細長い卵に脚が生えたような飛行艇が鎮座しており、四方八方へ光を放っていた。

飛行艇に乗り込んだ時、ギルバートを見つけてリアは思わず頬が緩んでいた。手持ち無沙汰な様子で歩き回っていたギルバートは、リアをちらっと見て、そのまま操縦室へ入っていった。

今回の飛行艇は以前乗ったものより大きい。リアはイスに腰掛けると、琺瑯の容器を抱えて目を閉じた。

どうか、みんな無事に仲良くクラウンまで行けますように。

林檎のタルト（後書き）

シュトロイゼル：そぼろ状クッキー

時の魔法

ごうん、ごうん、と音がする。
気がついたら日が昇っていた。
リアは周りを見渡して、窓から光が差し込んでいるのに気が付いた。あのまま寝てしまったんだ。イスに座ったまま寝るなんて、今までした事がなかったけれど、肩は重いし脚は張ってるし、あんまりすっきりしていなかった。今晩からは床に寝かせてもらおうかな。
リアの座席の斜め向かいの席では、ギルバートがいて本を読んでいた。2段重ねのバスケットに脚を伸ばして乗せていて、読んでいる本はやけに分厚かった。
「おはよう」
リアが声をかけると、ギルバートはちらっとリアの方を見て、また本へ視線を戻した。ページをめくって、またちらっとリアの方を見た。
「もう昼だぞ」
「え」
「ほぼ一日半爆睡」
ギルバートが2段重ねのバスケットから脚を降ろした。下の段から葡萄ジュースを取り出して投げて寄越す。リアは抱きかかえるようにして受け取った。
「ありがとう」
「べつに。上の兄貴は飛行艇の操縦に専念してるし、クロード兄貴は通信室で王宮とずっと双方向通話だ。邪魔するなよ」
「アドラーさんは？」
「あいつも操縦室」
「そっか」
リアは立ち上がって、うろうろし始めた。それをちらちら見ながら、ギルバートは徐々にいらいらした様子で、ひざを揺らし始めた。

「ねぇ」
「何だよ！？」
「この飛行艇、トイレってあるよね？」
……。
ギルバートの座るイスのすぐ後ろにある扉が開いた。部屋へ戻ってきたリアは、さっき渡された葡萄ジュースを手にギルバートの向かいの席へ座った。ギルはちらっとリアを見て、視線を本に戻した。
「何か用？」
ぶっきらぼうにギルバートが言った。リアは言い間違えないように、ゆっくりめに尋ねた。
「時をさかのぼる魔法はリスクが大きいって言ってたけど、なんで？」
ギルバートは眉根を寄せて、リアを見た。
「お前、学校行ってないのか？」
「覚えてないの」
ギルバートは鼻で笑って、鳥の羽根を栞にして本を閉じた。随分とリアを見下した表情で足を組み替える。
「時をさかのぼる魔法は、時の魔法の一種だ。魔法陣・祭壇・供物を使う。失敗すると、そういうものが壊れたりする。酒壺が割れたり、スイカが爆発したり」
「え、スイカ？　果物の？」
「供物によく使うんだ。爆発したりはしても、別に危ないわけじゃない。兄貴が言ってたリスクって言うのは別物だ」
想像するしかないけど、スイカの爆発は結構怖い気がする。果汁を吹き出しながら種が飛んでくるんだろうか。分厚い皮が飛んできて当たった痛いだろうな……リアはそんな風に考えていた。
「リスクが大きいってのは、時間が関わるからだ。成功しているものを例にして言えば、時の魔法は複合魔法で、時空の移動は移動に

こそ時間はかからないが、経過時間は重要だ。ワームホールの逆の発想で、ホールを通る分遠回りしていて、ホールが異時空ってイメージで語られる。物質の時間経過は一方向にしか進まないから、現実と過去とのギャップを調節する必要があって、ギャップを埋める分が供物だったり祭壇だったりする。余剰魔力とか。魔法陣には対象者の時間の固定、滞在時間、往路復路の入口出口、あと滞在中の時間の進行とか、まあ諸々を記述する必要があって、そういうあらかじめ魔法陣に組み込んだ情報を対象者が超過すると、その時空に対する変化の影響を抑えきれなくなるから……」

リアは首をかしげて、苦笑いした。

「よく、分からない、です……」

「あー面倒くせぇ」

ギルバートは葡萄ジュースを取り出して、瓶の封を切って半分位まで一気飲みした。

「例えば、俺が、過去に行って、過去の人間を死なせてしまったとする」

「え……」

「例えばだ！　死んだその人はまだ子どもだった。もしその子どもが俺の先祖だった場合、その子どもが死んだ瞬間に俺は存在しなくなる。時間が関わる、つまり過去と現在と未来が関わる。どう変化するか詳細が完璧には分からない、よってリスクが大きい」

「じゃあ、人の命を救ったら？」

「それも同じだ。過去を変えれば現在が変わる。逆に、現在の人間が未来へ行って、戻ってきて、未来の技術を現在で使うと、あったはずの未来は失われる。現在が別な未来の方向へ進む。順序の伴わない変化なんだ」

リアはちゃんと理解できているかかなり不安だったけれど、とりあえず危険な要素がある魔法なんだという事は理解した。

「……すごく詳しく知ってるんだね」

「まあな」

ギルバートは残りの葡萄ジュースも飲み干した。瓶を壁際の籠に投げ入れ、足元のバスケットに脚をのせた。
「そういうのって、勉強すれば、分かるようになるもの？」
「魔法ってのは、勉強すればある程度の仕組みは分かる。あとは体験だ」
栞代わりの鳥の羽根に触れて、ギルバートは呟くように答えた。
「俺が時の魔法に関して詳しいのは、勉強したからってのもあるけど、それだけじゃない。時をさかのぼる魔法の発動に成功した事があるからだ」
本を開いて鳥の羽根を席の肘掛けに刺し、ギルバートはさっきと同じ体勢に戻っていた。リアはもっと聞きたい事があったけれど、これ以上自分が混乱すると困るので、大人しく座って窓の外を見ている事にした。
眼下に雲が見える。その狭間から見える大地は枯れ草色だ。
「なあ」
ギルバートが声をかけてきた。視線は本に向けられたままだったけれど。
「なんで時をさかのぼる魔法に興味があんの？」
リアは窓の外を見たまま答えた。
「過去に行ったら、今の自分が覚えてない事とか、忘れてしまった事とか、思い出せるかなって、思って」
「ふうん」
ギルバートは本を読む事に集中していたし、リアは徐々に変化する窓の外の世界に釘付けだった。それからずっと、2人は一言も言葉を交わさなかった。

首都クラウンにて

目が覚めたら、ふかふかのベッドの中にいた。天蓋には星空が描かれてる。隣に男の子……アリスティドが寝てる。起き上がってベッドを降りた。ワインレッドの花柄絨毯もふかふか。裸足でうろうろ歩き回り、洗面台を探して隣の部屋へ入ると、楕円形のソファでギルバートが丸くなって眠っていた。

リアは手当り次第に扉を開けて、洗面台を見つけるととりあえず顔を洗った。

そう言えば、昨日の昼過ぎに到着したんだっけ？

もう日にちの感覚がおかしくなっていたので、今が何日かよく分からなかったけれど、とりあえず到着した事だけは覚えていた。

ベッドに戻ると、アリスティドがもぞもぞと寝返りを打っていた。寝顔が可愛い。すごく可愛い。アリスティドの頭をそっと撫でてみた。寝ぼけた声でうーんと言って、シーツに包まってだんごむしになった。

ああ、なんて可愛いんだろう。

ぎゅっと抱きしめたい。

でも、さすがに抱きしめるのはよくないよね……そういえば、アリス君の方が年上だし、と思って、リアはベッドの側を離れた。アリスティドの寝顔は初めて見たけど、あんな寝顔を横で見られるのは幸せだ。

本気で、アリス君くらいの弟がいたらよかったのに、と思った。兄はいた記憶がうっすらあるけれど、弟は一緒にいなかった気がする。クロードの診察を受けてから何日か経ったはずだけれど、リアの記憶はさっぱり目を覚ましてくれていなかった。やっぱり、診察だけじゃ記憶は戻らないのかな……。

「さて、今日の朝ご飯は何だろっ」

リアは大きく息を吸ってカーテンを開けて陽の光を浴び、置き時

計を手に取った。
時計の針は１２時３０分を指していた。
「……あれ？」
クラウンの屋敷の食堂は、イストベルクの屋敷に比べればこぢんまりとしていた。壁２面と天井がガラス張り、床は大理石で階段状になっており、幾何学に掘られた溝を水が流れ落ちて堀に合流し、所々で水辺の草花がいきいきと花を咲かせていた。水上ステージのような楕円の足場に、真っ白なテーブルと椅子が置いてあり、リアとアリスティド、ギルバートはそこで昼食を食べていた。アドラーが用意したのはコンソメとチーズのお粥で、イストベルク地方特産の歯触りの良い梨がデザートに出た。その梨が無ければ、今が秋だという事を忘れてしまいそうな部屋だった。
「えっ、アリス君、魔法学院に一緒に行けないの？」
アリスティドがミルクティーをかき混ぜながらため息をついた。
「学院の緊急会議が入っちゃって、ぼくは魔法学院の見学に行けないんだよー」
アリスティドは心底残念そうな表情でうなだれた。
「学院までは一緒に行けるんだけどね、ぼくだけ別な部屋でハゲでデブで脂ぎったおじさんたちと会議だなんて……うう……考えただけで気が滅入ってくる」
「国宝級魔法使いの仕事なんだろ」
ギルバートが梨をしゃくしゃく食べながら言った。
「ぼくにガッコーの先生なんて似合わないでしょ！？」
「確かに似合わねぇ」
「でしょー！」
「でも仕事なんだろ」
紅茶を一気飲みすると、ギルバートは背もたれに体重を預けて、行儀悪く足を投げ出した。すごく偉そうな感じ。でも実際、偉いん

だよね、確か……リアはティーカップを口にあてたまま、アリスティドとギルバートを交互に見た。
アリス君は遊ぶのが好きなのは分かるけど……ギルバートが真面目。ちょっと意外。
キャラメルの甘い香りがしたので、紅茶を一口、口に含んだ。甘くない。
「だから困るんだよー。リアちゃん、学校の事は何か覚えてる？」
「……えーと、」
「危険事項にあたる、時の魔法の事すら忘れてんだ。どーせ大した内容、覚えてないさ」
ふんぞり返ったまま、ギルバートがリアの言葉を遮った。
「ぼくが先生をやってる魔法学院は、魔法を使える国家公務員の養成施設なんだ」
アリスティドがリアの方に向き直って、フォークで梨をサクッとさした。
「地方にはそれぞれ魔法使い養成施設があるんだけど、高位の……そこそこの社会的地位を持つ魔法使いになるには魔法学院を卒業するのが一般的。学院に入るには、初等教育、中等教育、高等専門教育を受けなきゃいけない。高等専門教育が終わるのが、平均して１９歳かな。この国だと誰でも最低半年間は初等教育家のプレ教育を受けるんだけど、そのときにかならず【あぶないまほう】とか言って、時の魔法とか、不均衡魔法とか、どうして危険なのかを教わるんだよ。読み書きができなくても覚えさせられるんだけど……覚えてない？」
リアは頷いた。全く記憶にない。目の端で、ギルバートが小馬鹿にしたようにリアの事をちらっと見たのが見えた。すぐに梨を食べるのに戻ったけれど、リアはなんだかいい気分じゃなかった。

首都クラウンの旧市街地は、人通りが多くて道幅が狭く、馬車だと移動にすごく時間がかかるらしい。
クラウンは真ん中に王宮、堀を挟んで周りに旧市街地、城壁があってそのまわりに新市街地、更に新しい城壁が囲っていて、その周りにはぽつんぽつんと民家がある。由緒正しい大貴族の屋敷は大抵旧市街地のイスト地区かウェスト地区、そこそこの貴族だと新市街地のイスト地区かウェスト地区にある。新旧サウス地区は運河を使った輸送と加工の拠点で、いわゆる庶民の住む地区として賑わっている。旧ノルス地区には魔法学院と研究施設、新ノルス地区は軍の演習場がある。今、クラウンから見て北に位置する地方都市ノルスブルクとは緊張状態が続いているらしく、新しい城壁の外のさらにむこう、領地線の近くは武装した人たちがいて物騒な状態だそうだ。
リア達のいるヴィズィオネル家の屋敷は旧イスト地区にあり、旧ノルス地区にある魔法学院までは、リーカーという名前の馬の繋がっていない車で移動することになった。リーカーは魔法で動いている、空飛ぶ車らしい。どっちへ進むかは人の手で決めているみたい。操縦はアドラーがしている。窓から見えるのは家々の屋根ばかりだったけれど、初めて見る屋根の海にリアの目は輝いていた。
多くの家が赤褐色の屋根瓦で、屋根の上に花を植えたり、鳥小屋をつくったりしていたけれど、少し先には屋根がぽっかりとない地帯があり、その先にそびえる白い壁の城が強い存在感を放っている。城の屋根は青いようだ。
「レゼン先生はもう１００歳を超えたと思うんだけど、国一番の歴史研究家で、この国のほとんどの魔法使いがレゼン先生から、国史とか占星術とかを学んでるんだよ」
「すごい先生なんですね」
楽しみだなぁ、とリアが思っている横で、ギルバートは腕組みをして、足を反対側の座席の乗せて眠っていた。と、思ったら。
「とんでもねぇ助平ジジイだ」
聞こえるか聞こえないかの声でぼそっと呟いた。

首都クラウンにて（後書き）

だんだん行間が詰まってきました……。どうもすみません；；

魔法学院

リアが初めて見た印象で言うと、魔法学院というのは、すごく広い敷地にすごく大きな建物がばんばん建っていて、その間を老若男女が真っ黒いローブ姿で歩き回っている場所だった。リアは紺のワンピース、ギルバートは相変わらず黒のパンツに白いシャツだったので、ちょっと目立った。

「あれ？　あの黒いローブって……」

「俺が着てたのと同じだ」

リアの隣に建ったギルバートが応えた。アリスティドはすでにアドラーに連れられて会議室へ向かっている。

「じゃあギルバートもここを卒業したの？」

「14歳の時に。ていうか何で呼び捨てなんだよ」

「え？」

「普通、さんとかくんとか敬称つけるだろ。まったく……」

「でも……なんか、そう言う印象無くって……同い年くらいだし」

ギルバートが不満そうな表情でリアを見た。リアはあえてそれを無視した。

「じゃあ、ギルバートは優秀なんだね」

「え？」

「さっき、アリス君が、高等専門教育を終えるのが大体19歳って言ってたから、それよりすごく早く卒業してるじゃない」

「まあ……うん」

「それで、レゼン先生って？」

リアが尋ねると、ギルバートは目を泳がせて、ため息をついた。

「とりあえず腹が減った」

「もう！？」

「学食に行く。レゼン先生はその後だ」

そう言って、ギルバートはすたすたと歩き始めた。歩くのが早い。

リアは慌てて追いかけた。そのとき、ギルバートの背中が、いるべき場所はここだ、と言っているような、自信に満ちているような……そういう、今までにない堂々としたものを、リアは感じていた。

レゼン先生は魔法学院の真ん中に建つ建物の西側、魔法文科棟の最上階にいた。魔法文科棟はすごくシンプルな作りだったけれど、廊下の至る所に棚やら箱やら衝立てやらが置いてあり、非常に手狭な雰囲気だった。そのうえ机と椅子が色んなところに置いてあって、黒いローブを着た人たちが、それぞれ作業をしていた。

そして、レゼン先生の部屋も例に漏れず、大量の本棚と書類と衝立てで、非常にごちゃごちゃとしていた。レゼン先生は紺色のローブに、色のくすんだ金のベルトをした、壮年の男性だった。わずかに白髪のまじる髪は短めにカットされ、目元のしわはそれなりの年齢だと思わせるが、ローブを着ていても引き締まった印象を与える姿勢の良さだ。

「よくきたね、私がレゼンだ。アリスから話しは聞いている。立ち話もなんだから、さ、こっちへ」

さりげなくリアの腰に手を回してエスコートしていくのを、ギルバートは「相変わらずだな」と思いながら後ろから付いて行った。奥の方には来客用の部屋があった。様々な地方のタペストリーが飾られたその部屋で、革張りのソファに腰掛け、お茶を出した黒いローブの女性が退出してから、レゼン先生はリアの方へ向き直った。

「改めて自己紹介をさせてもらうよ。私はレゼン＝ユェ＝ティーチャー。“読み理解する＝あなたの＝先生”なんて、妙な名前は親の遊び心だよ」

「リアです。よろしくお願いします」

レゼン先生は名実共に先生なわけだ。リアは妙に納得した。

「君は……誰だっけね？」

言われて、ギルバートは呆れたように息を吐いた。

「ジルベール＝ラス＝ヴィズィオネルです」
ん？
じるべーる？？
「ギルバートじゃないの？」
「ギルバートはイストベルク地方の読み方。正式な読み方はジルベール」
そうなんだ、とリアが思っていると、レゼン先生は思い出した！
といった感じで手を打った。
「ああ、ギリー君か」
「そうです」
ギルバートは横柄な態度で脚を組んだ。レゼン先生は気にするそぶりも無い。
「ギリー君は中等部から私の研究室に出入りしているんだが、いつもやる事がきわどくてね。ギリギリのギリー君。もちろん良い意味でだ」
楽しそうに紅茶をすするレゼン先生。
「さて、何について聞きにきたのかな？　大概の事はギリー君が知っているから、わざわざ私に聞きにくるなんて、よほどの事だと思うが」
「俺は別に……付き添いですから、こいつの」
目だけでリアを指して、ギルバートは腕を組んだ。
「俺の事はおかまいなく」
レゼン先生はそうかい、というと、本当にギルバートの事を無視したように話し始めたのだった。

「さて、リアさん。アリスから説明してほしいと言われた事に付いて、私は君に話すよ。もし質問があったら、その都度言ってくれて構わない」

「はい」
レゼン先生はリアに紙を一枚とペンを一本、手渡した。
「今日は危険な魔法、この国の歴史と魔法使いの派閥について簡単に講義をしよう。メモをとると覚えやすいと思うよ」
にこりと、レゼン先生は笑った。リアは頷いて、特別講義メモ、とタイトルを付けた。
それが、特別講義の開始の合図だった。

あなたの先生

特別講義メモ
＜危険な魔法＞
危険な魔法はおおまかに2種類ある。時の魔法と不均衡魔法

時の魔法
時というのは、過去～現在～未来と連続している。
・時をさかのぼる魔法
過去を体験する魔法のことで、過去へ旅行するイメージ。
現在へ戻って来れる場合と、戻って来れない場合がある。
・時を先取りする魔法
未来を体験する魔法の事で、未来へ旅行するイメージ。
現在へ戻らなければならない場合と、戻らなくていい場合がある。
（・時をとめる魔法
時間の進行を止める魔法。時間を止めるために魔力を使い続ける。）
2つの魔法は、旅行中にアクシデントがあると命に関わる。
世界の存亡に関わる事もある。
ワームホール？　理論で使う用語。

不均衡魔法
アンバランスである場合と、アンバランスにする場合とがある
・費用対効果がアンバランスである場合
費用：魔法の発動に使ったもの（魔法陣、祭壇、供物、場所、集中力など）
効果：魔法を発動して得られたもの（呼び出した精霊の強さ、火玉の威力など）

※費用はお金じゃなくて、どのくらい魔力を補助できるか＝魔法的価値

例：巨大魔法陣で、祭壇を作って、沢山果物を供えて、下級精霊1体を呼び出す

↓余った力（価値？）が逃げて、周りの他の魔法に悪い影響をあたえる

・アンバランスにする場合

法則とか、詳しい事は省略

例：星を落とすと他の星に影響する＝アンバランスになる

↓　他の星同士がぶつかったり、落ちてきたりする

レゼン先生は冷めたお茶を飲むと、歴史と魔法使いの派閥の話に移った。

「ちょっと魔法の方で話しすぎたね。歴史の方はさくっと話してしまうよ。この王国はカルロス1世が築いた。今７００年くらい保っているね。これはカルロス1世が作った結界を、代々受け継いで守っているからだ。そしてもう一つ、魔法使いの多くがルース派というグループに参加して、大体仲良くしている。内輪もめは多少あるがね。ルース派じゃないグループの代表格がヴィライン派というグループだ。ヴィライン派は結構前に流行したグループで、その時はかなり参加者も多かった。カルロス5世までの国王のほとんど全員がヴィライン派だ。カルロス5世はヴィライン派だったんだけど、その息子のベルナールはルース派だった。ベルナールが国王になったのを境に、ヴィライン派はすごく小さなグループになってしまった」

リアはなるほど、と頷いた。ギルバートは完全に寝ている。寝息が聞こえる。
「そこで、話は今に戻るけれど、北のノルスブルクを治めるエルヴァスティ家が『真の王家はエルヴァスティ家だ』と言い始めた。裏工作って言うのはいつの時代でも起きるものだけれど、今それにヴィライン派の魔法が使われているようだ」
なるほど、とリアは再び頷いた。
「つまりだね、アリスが私に言ってきた事は、『ヴィライン派に気をつけろ』ってことだ」
レゼン先生はにっこりわらって、さて講義は終わり、と告げた。そして、リアの手をそっと取ると、両手で包み込んで、リアの目を見つめた。
「美味しいケーキを出す喫茶店があるんだが、一緒にどうかな？」
「えっと……あの、ここへくる前に、食堂でお腹いっぱいになっちゃってて……」
「そうか。残念だが、食べ過ぎは体に良くないからね。また今度お誘いするよ」
リアの手を包み込んでいた手を離すと、パンパン、と打ち鳴らした。
「はい、講義は終わりだよ、ギリー君」
「あー……今日は短かったですね」
「君があまりにも用意周到だったからね。1階のロビーにギリー君を待っている人がいるはずだよ。君が呼んでいたんだろう？」
ギルバートは首をひねったが、レゼン先生は笑顔で、別に気を悪くした様子も無く、2人を部屋から送り出した。扉を閉めて、大きく息を吐いた。
「天秤が傾きすぎないよう、話したい事をすっきり全部話すことが許されないなんて。　無派閥って言うのもまた面倒くさいものだね、エミリオ君、クロエ君」
何処からともなく現れてティーカップの片付けをしていた双子の

学生は、異口同音「まったくです」と答えた。

ロビーには何人もの学生がいたが、ギルバートの姿を見留めて迷わず駆け寄ってくる人物がいた。ユレルミだ、とギルバートは呟いた。

「お久しぶりです！」

色白の青年は、寝癖なのかファッションなのかよく分からない髪型をしていて、黒いローブを着ていた。きっとここの学生だ。

「元気そうだな」

「もちろん！　なんとか無事に最終学年まできましたよ！　論文で試験免除なんてはじめてですよ！」

「あー、『時をとめる魔法についての一考』だっけ。読んだけど、なんだよ、あれ」

「いやぁ、奇を衒ってみたら、レゼン先生がお気に召してくださって。あ、学食行きます？　カフェテリアはもう食べ物が無いと思うんで」

「いや、レゼン先生のところに行く前に済ませた。もう入らねぇ」

「そんな事言ってー。こっちの方は？　フィアンセ？」

え？　今なんて言ったの、この人。

「お前ッ！　レゼン先生の影響だな！？」

「そんなことないですってー！　あっ！　ちょっ、叩かないでくださいよ！」

脇腹を小突いた程度で大げさな奴……と、思いながら、ギルバートは腕組みした。

「こいつは真ん中の兄貴の患者だ。上の兄貴がレゼン先生に会わせてみたいっていうから、連れてきた」

「え、ご病気ですか」

ユレルミが驚いた表情でリアを上から下まで見た。

「全く健康に見えますけど」
「俺もどんな病気かは知らねぇよ」
「へぇ～ちょっといいですか」
言うや否やリアの手を握ると、ユレルミは目を閉じた。何かを感じ取っているようだ。
「うわー強い守護ですねぇ。僕じゃ太刀打ちできません！」
「いや、もともとお前強くねぇだろ」
「そうですけどね、ここは一応、レディの前ですから」
と、リアの手を離しながらユレルミは笑った。そういうなら勝手に手を握らないでほしいな、とリアは思った。
「はじめまして、僕はユレルミ＝ハルヴォニです。先輩が学院の最終年のとき僕は2年生でした。北の田舎出身ですけど、よろしくお願いします」
「リアです。今はヴィズィオネル家にお世話になってます」
ユレルミはリアに小さな包みを3つ渡した。赤、青、緑の3色だ。
「アメです。よかったら、お近づきのしるしに」
「あ、ありがとうございます……」
「そんでユレルミ、俺に何か用事でもあったのか？」
「そうでした、そうでした。叔父からです」
ローブの袖奥からユレルミが取り出したのは小包だった。
「長い事お待たせしてすみませんでした」
「いや……」
「じゃ、僕はこれで。そろそろ戻らないと炉が爆発しそうなので」
ユレルミはあっさりと踵を返して、小走りで去って行った。ギルバートは小包を手に持て余すように持ち替えて、リアを無視して、さっさと歩き出した。リアはそれを追うように小走りでついていき、2人は黙って、アドラーの待つリーカーの駐車場へ向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4492x/

S.I.C.　-the System of Isolation for C.

2011年11月20日18時47分発行